

特集

前眼部感染症の基本と将来の展望

序 論

根岸一乃*

前眼部感染症は、結膜炎や角膜炎をはじめとして日常診療で遭遇頻度の高い疾患群であるが、重症化すれば不可逆的な視機能障害を引き起こし得る重要な病態である。近年はコンタクトレンズ装用者の増加、高齢化、免疫抑制状態の患者の増加などを背景に、感染症診療を取り巻く環境は大きく変化している。また、薬剤耐性菌への対応や遺伝子解析技術の進歩により、前眼部感染症診療は新たな時代を迎えつつある。

本特集では、「前眼部感染症の基本と将来の展望」をテーマとして、前眼部感染症診療の歴史的背景から、診断・治療の基本、さらに最新の診断技術や術後感染対策までを幅広く取り上げた。

戸所大輔先生には、「前眼部感染症診療のヒストリエ」として、トラコーマや匍行性角膜潰瘍が失明原因として大きな問題であった時代から、抗菌薬・抗生物質の登場によって診療体系がどのように変遷してきたかについて、豊富な歴史的資料とともにご解説いただいた。感染症診療の進歩そのものが、眼科医療の発展と深く結びついていることを再認識させられる内容である。

山田昌和先生には、「前眼部感染症の所見の取り方」として、問診、細隙灯顕微鏡検査、病原体検索という感染症診療の基本について、実際の症例を交えながら実践的にご解説いただいた。患者背景や臨床所見から起炎菌を推定する考え方や、

感染性角膜炎と非感染性病変との鑑別など、日常診療に直結する知識がまとめられている。

庄司 純先生には、「アレルギー性結膜疾患に合併する前眼部感染症」として、アトピー素因を背景に発症する細菌・ウイルス感染症についてご解説いただいた。アレルギー性眼疾患患者では眼表面バリア機能の破綻やステロイド使用などを背景として感染症を合併しやすく、その早期診断と適切な治療介入の重要性について詳述していただいた。

山口剛史先生には、「角膜移植・屈折矯正手術後の感染症対策」として、近年増加している角膜移植や屈折矯正手術後における感染症管理についてご解説いただいた。これらの手術は視機能向上に大きく貢献する一方、術後感染症は重篤な視機能障害につながる可能性があり、術前・術中・術後を通じた感染予防対策が極めて重要である。特に、コンタクトレンズ管理、術後眼表面環境の維持、適切な抗菌薬使用など、多角的な感染管理の必要性が示されている。

堀田芙美香先生には、「メタゲノム解析を用いた前眼部感染症診断」として、次世代シーケンサーを用いた新しい感染症診断技術についてご解説いただいた。従来の培養法では診断が困難であった症例に対しても、網羅的遺伝子解析を用いることで迅速かつ高感度な病原体同定が可能となりつつあり、将来の感染症診療を大きく変える可能性を秘めている。

*Kazuno Negishi 慶應義塾大学医学部眼科学教室

前眼部感染症診療は、歴史を振り返ることで現在の医療の意義を再確認できる分野であると同時に、診断技術や治療戦略の進歩によって今後さらに発展していく領域でもある。一方で、どれほど技術が進歩しても、詳細な問診と丁寧な細隙灯顕

微鏡診察という診療の基本が重要であることに変わりはない。読者の皆様には、本特集を通じて前眼部感染症診療の基本を再確認するとともに、最新知見と将来展望について理解を深めていただければ幸いである。